

蜜蠟の分析とデカルトの物体概念

竹中 利彦

序

よく知られるとおり、デカルトは次のような二元論を主張する。すなわち、世界に存在するものは精神的実体と物質的実体の二種の実体のみである。精神は思惟をその本質とし、物質は延長をその本質とする。これら二種の実体は互いに独立であり、まったく異なったものである。

このような存在論は、『省察』では、非常に簡単に言えば、次のような過程で打ち立てられる。すなわち、「第二省察」までに思惟する精神としての我の存在が発見される。次に、「第三省察」で神の存在が証明され、「第四省察」ではわれわれの認める明証性（明晰かつ判明であること）が真理の基準であることがその神によって保証される「明証性の規則」が定立される。そして「第五省察」および「第六省察」において、物質の本質が延長であることが示されて、精神と物体のおのおの明証的な観念から、それらが実在的に区別されるものであることがいわれ、最後に物質的な事物の存在証明がなされて、上記の二元論が主張されることになるのである。

以上のような『省察』の流れの中で、いわゆる蜜蠟の分析は、「第二省察」中にある。したがってこの分析は、蜜蠟という物体を扱ってはいるものの、私が精神であることを発見することを第一の目的とするものである。しかし、『省察』のシノプシスには、「物体的本性の判明な概念」は、「一部はこの第二省察そのものにおいて、一部は第五・第六省察においてつくられる」と述べられている。「第二省察」において、物体について詳しく言及される箇所は蜜蠟の分析をおいてほかにはないから、これは、蜜蠟の分析によって、私の精神のみならず、物体についても何らかの発見がなされることを示していると考えられる。

本稿では、蜜蠟の分析を、デカルトの物体概念との関連において取り扱う。そして、この分析がいかなる議論であるかを明らかにし、それが物体概念の形成においていかなる役割を果たすのかについて考えることを目標とする。

(1) 蜜蠟の分析の概要

蜜蠟の分析は、「第二省察」の後半に位置する。それに先立って、「第二省察」前半でデカルトは、我の存在と、その存在する我の本質が精神であることを結論している。蜜蠟の分析を考察するに際して、これらの結論の導出過程について注目すべきことは、感覚や想像力が精神を認識する手段としては斥けられているということである。

次に、蜜蠟の分析が始まるのであるが、上述のように精神は感覚や想像力によっては捉えられない。しかし我々は感覚や想像力を用いるのに慣れていて、そのような精神よりも、むしろ「心のうちにそれらの像を描き出すことができ、感覚そのものによってじかにつかまえることができる物体」のほうがはっきりと知られるように思ってしまう。デカルトはこのような我々の弱さを認め、先に認識の手段としては捨て去った感覚と想像力を駆使して、物体について考察してみようとする（「今一度、私の精神の手綱をすっかりゆるめてやろう」）。また、「一般的な概念はひどく混乱しているのが常であるから」（p.30）、物体一般を考察するのではなく、具体的物体に即して、考察がなされることになる。

蜜蠟の分析（pp.30-34）においては、同一の蜜蠟の、熱する前と後との状態が比較されている。熱する前には、蜜蠟は蜜の味やその花の香りを持ち、色、形、大きさは明白であって、堅くて冷たく、触れることができ、たたけば音がする。しかし熱が加えられると、味や香りは消え、色や形は変わり、大きさは増し、液状になって熱くなり、触れることは困難になり、たたいても音はしなくなる。すなわち、五感によって感覚されていたものはすべてその内容を変えてしまうのである。しかし、だからといってそのものが、もとの蜜蠟ではなくなったとは考えられない。それは依然として同じ蜜蠟であると考えられる。「誰もそれを否定しない。誰もそうとしか考えない。」

「それでは、この蜜蠟においてあれほどはっきり理解されたものは、一体何であったのか」とデカルトは問う。それに対するデカルトの返答は、「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」というものである。

したがって、感覚によって蜜蠟という物体の本性を捉えることはできない。さらに、その延長の量あるいは形の変化の仕方は無数であって、想像力によって捉えきることはできない。蜜蠟が何であるかを捉えるのは、感覚でも想像力でもなく、「精神」「精神のみによる洞見」であり、「この洞見が、その内容となるものに向けられる私の注意の程度に応じて、以前のように不完全で混乱したものであったり、現在のように、明晰で判明なものであったりする」とされる。また、この「精神の洞見」は、別の箇所では、「知

性」と言い換えられている。

こうして、物的な事物についてもそれを認識するためには感覚や想像力ではなく、知性によらねばならないことがいわれた。そしてデカルトはここで懐疑を復活させる。すなわち、私が蜜蠟を見る（と思う）とき、それが蜜蠟でないことや、あるいは私が目を持たず何も見ていないことがありうるのである。しかし、「（見ると）考えるこの私が何物かでないことは有り得ない。」このように、物体を理解するには知性によらねばならず、もし物体が存在しないとしても知性による思惟によってそれを理解していることは知られるのであるから、私の存在と、その精神であることは最初に知られることなのであり、「私の精神よりもより容易に知られるものは何もない」のである。

蜜蠟の分析は大略以上のようなものである。このうち、蜜蠟を把握するのが「精神の洞見」であることを結論する部分までを狭義の分析、そして、それ以降の部分を含む全体を広義の分析と呼ぶならば¹、広義の分析の結論が「私の精神よりも容易に知られるものは何もない」という、精神の物体に対する認識論的優位性であることは明らかであると考えてよいであろう。蜜蠟の分析は「人間の精神の本性について。精神は身体よりも容易に知られること」と題された「第二省察」にあり、物体を扱ってはいても、精神としての私の発見を目的とする。

しかし、特に蜜蠟という物体についての考察がなされる狭義の分析については、様々な解釈がなされている。例えば、そこで把握されているものが物体の本質としての延長であるとする説や、蜜蠟という物体の実体であるとする説などである。そして、本稿の目的も、物体概念との関連において蜜蠟の分析を考察することであるから、次、それらの解釈のうちの幾つかを紹介し、検討してみたい。なお、以後単に蜜蠟の分析という場合、この狭義の分析を指すものとする。

(2) 「物体の本質としての延長」と蜜蠟の分析

よく知られているように、デカルトは物体を、幾何学的延長を本質として持ち、色や香りなどの感覚的性質を持たないものと考えた。まさに「第五省察」以降において規定される物体とは、そのようなものである。そこで、蜜蠟という物体を、感覚的性質を持ったものではなく、知性によって把握される「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」とするこの分析が、物体の本質を幾何学的延長と定める議論であるとするのは、自然な解釈であろう。また、事物の本質とは、その事物の変化を通じて同一のものと考えられるから、その点でも、「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすい

あるもの」を物体の本質と考えることができるだろう。²

もちろん、「第二省察」のこの段階においては、物体の存在はいまだ懐疑の中にあり、それどころか精神としての我の存在以外の事柄を確実な知識として主張する権利はデカルトにはない。しかし、蜜蝋の分析によって、幾何学的延長が把握されており、これが、神の存在証明、明証性の規則の確立を経て「第五省察」以降において物体の本質として規定されるのだと考えることができるように思われるのである。

しかし、このような解釈には、幾人かの研究者が異論を述べている。ここでは、もしこの解釈が「この（蜜蝋の分析の）議論を正しく表しているなら、デカルトの推論は明らかに無効なものだ」と述べるウィリアムズの反論（Williams, pp.217-218）を見てみることにする。

第一に、本質についての言明は実際無時間的で必然的なものであり、変化する状況によって反証されることはありえないけれども、その本質についての言明が変化する状況における変化に言及できないと考えることは誤りである。例えば、蜜蝋が熱する前のある温度である色を持ち、熱した後のある温度である色を持つことは、その蜜蝋の本質ともいいうるのである。

第二に、蜜蝋の分析において色という感覚的性質を持つ特異性がある。蜜蝋に熱を加え、香りや味が消え失せたとしても、「色だけは、異なった地位にあるように思われる」。すなわち、「蜜蝋が香りをまったく持たないようないくらかの状態があるとしても、少なくともデカルトの例において記述されている限りでは、蜜蝋が色を持たない状態はまったくないように思われる」のである。もし、蜜蝋の分析において見出されるものが永続する実体性の記号としての本質であるならば、「何らかの仕方では色を持つ」ということも同様に、本質とみなされなければならない。また、蜜蝋において色は変化するという口実に、それを本質ではないとすることもできない。なぜなら、デカルトの結論は蜜蝋が「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」ということであって、蜜蝋の本質でありえるのは「何らかの仕方では延長を持つ」ということになるが、そうであるならば、「単なる限定されていない延長、すなわち様々な仕方では限定される延長が本質的な特性の役割を果たすならば、限定されていない色、すなわち様々な仕方では色を持つということが、どうして除外されるべきなのか」わからないことになってしまうのである。

第三に、色とは違い、香りなど熱せられた後で消える性質についても第一の反論が当てはまる。ある状況において香りを持ち、違う状況においては香りを持たないことが、

蜜蠟の本質かもしれないのである。

注意しておくならば、以上の議論によって明らかになったことは、蜜蠟の分析が物体の本質としての延長を把握することを目的としてなされたものではない、ということである。分析の結果見出された「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」が物体の本質としての延長である、または、それに関係するという可能性はある。しかし、蜜蠟の分析だけでは、物体の本質を延長と規定することはできないのである。

(3) 「物体の実体」と蜜蠟の分析

次に、蜜蠟の分析は、蜜蠟の「実体」を知性によって把握することを目的とすると考える解釈を見てみることにする。

『省察』に対する「第五反論」のガッサンディは、デカルトの分析が「蜜蠟の偶有性と呼ばれるものと蜜蠟そのもの、あるいはその実体とは異なるものであること、そして蜜蠟それ自体あるいはその実体を判明に把握するためには、単に精神もしくは知性のみを必要とするのであって、感覚や想像力は必要としないこと」(p.270、強調は筆者による)を示そうとするものだと考える。つまり蜜蠟の分析はその実体を明らかにするための議論であると考えるのである。その上で、「蜜蠟からその諸形態を、いわばその衣装のようにすっかり取り除いてしまった後に、より完全にかつより明証的に蜜蠟が何であるかを把握するといかにして言うことができるのか」と反論する。そしてガッサンディに対する「第五答弁」でデカルトは、「私は蜜蠟の概念をその偶有性の概念から抽象したことはない」「むしろ私は、どういふ風にして蜜蠟の実体とその偶有性によってあらわにされるか、…を示したいと思った」(p.359、強調は筆者による)と答弁しているのである。この「第五答弁」のデカルトの言葉を根拠に、蜜蠟の分析の結果、知性によって把握されるものが蜜蠟の「実体」であると主張することができるように思われる。

しかし、この解釈にも難点がある。デカルトは『哲学の原理』第一部第六十二節で、実体と、「それなくしては当の実体を理解しえないような属性」との間の区別を、「観念的区別」と呼ぶ。そして、思惟や延長の概念と実体の概念との間には「観念的区別」しかないと言っている(同第六十三節)。つまり、蜜蠟という物体の実体を理解しようとするれば、その本質である延長を理解しなければならないということになる。結局、デカルトが蜜蠟の分析において蜜蠟の実体を明らかにしようとしていると考えることは、その本質である延長を明らかにしようとしていると考えることに帰着してしまう。そうすると、(2)でとりあげられた難点が再び持ち上がってしまうのである。

このような、実体の探求が本質の探求に帰着してしまうという難点を克服して、蜜蠟の分析における知性の把握の対象が実体であるという主張を維持しようとしたのがベイサードの解釈である (Beysade, pp.14-19)。まずベイサードは、分析により発見されるものを物体の本質や存在であるとする解釈を次のように批判する。『省察』のシノプシスにおいては、物体的本性の判明な概念は「一部はこの第二省察そのものにおいて、一部は第五・第六省察においてつくられる」と述べられているが、「第六省察」は感覚を抛り所として物体の存在証明を、「第五省察」は「判明な想像」を抛り所として延長、その形、その運動を認識するのであるから、感覚や想像を遠ざける蜜蠟の分析は、物体の存在や本質を問題にしていないことになる。そしてベイサードも、上で挙げた「第五答弁」におけるデカルトの言葉を根拠とし、さらに、『省察』ラテン語原文に現れるが、仏訳版では無視されている「そのもの ipsam」「それ自体 ipsammet」という語が、実体を表していると考え。その上で、デカルトにおける「観念的区別」が、スコラ哲学における「無抛の観念的区別」のように事物における根拠のないものではなく、「有抛の観念的区別」のように、事物においてその区別の基礎を持っていると考える。そしてこの意味で、デカルトの観念的区別は、実体間の区別のような、一種の「実在的区別」と考えられる。従って、蜜蠟の実体を、その属性から区別して把握することが、純粹知性によって可能だとするのである。そしてベイサードは、「精神を素朴な感覚に執着した意見から、純粹知性の作用の認知にまで導くのは、ここでは何の特権も持たない延長の観念というよりも、実体の観念である」と述べている。

この解釈においてベイサードは、「第二省察」において物体の「実体」が、「第五省察」において物体の「本質」が、そして「第六省察」において物体の「存在」が明らかにされ、それらがシノプシスで言われる「物体的本性の判明な概念」を構成すると述べているように思われる。そして、「第五省察」が想像力を、「第六省察」が感覚を用いてそれぞれ物体の「本質」と「存在」を明らかにしているから、感覚と想像力を排除する「第二省察」は、「実体」を明らかにするためのものだ、と考えているようにも読むことができる。しかし、もしそうだとすると、この解釈には賛成できない。その理由は二つある。

第一に、確かに「第五省察」においては幾何学的な量を「判明に想像する」(p.63)とされているが、この「想像する」という言葉を文字通り「像を持つ」という意味に解することはできないであろう。「第六省察」においては、五角形を想像することはできても、千角形や万角形を想像する、「あたかも現前しているもののように直観する」ことはできないと述べられており (pp.72-73)、幾何学的なものをすべて想像力によって明晰か

つ判明に理解することはデカルトにとって不可能であり、幾何学的延長を知性が理解するに際して想像力はただそれを助けるだけなのである。従って、ここでの「想像する」能力は、知的な能力を指すものとして用いられていると考えねばならない。³

第二に、シノプシスで言われている「物体的本性」は心身の実在的区別に用いられるべく導入されているものであって、それに後続する感覚による物体の存在証明の議論はここでは関係がない、という難点もある。

ただし、ベイサードは、蜜蠟の分析が、物体の「実体」を明らかにするためのものだ、とはっきりと述べているわけではない。ベイサードは、蜜蠟の分析における純粹知性の作用の対象が、一般的に解釈されるところの物体の本質としての延長の観念ではなく、またその存在でもなく、実体の観念である、と述べているのであって、蜜蠟の分析の目的が「実体を明らかにする」というものだとは述べているのではないのである。しかし、繰り返して言うが、もし、蜜蠟の分析の目的が物体の「本質」や「存在」を明らかにすることではないということから、そこで明らかにされるものが「実体」だとするならば、それは上述の理由から受け入れることはできない、と考えられる。

さらに、「観念的区別」についてのベイサードの見解が正しいものであり、その属性とは区別された実体を純粹知性が把握しようとしても、少なくとも蜜蠟の分析においては、知性によって把握されるのは「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」という、何らかの属性を持つものである。ベイサードは、延長を想像力による表象が必要なものと考えていることから、明らかに延長と関連すると思われる「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすい」ということを知性によっては把握できない、と考えるであろうが、上に述べたように、延長は知性によって把握されるものである。そして、「第二省察」の記述を読む限り、知性によって把握されるのは「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」と考えざるをえない。

では、上に挙げた、「第五省察」のデカルトの「むしろ私は、どういう風にして蜜蠟の実体がその偶有性によってあらわにされるか、…を示したいと思った」という言葉をどう考えるかであるが、これは、ガッサンディの言葉に引きずられたものとしなければならないであろう（持田,p.74）。

(4) 認識論的議論

蜜蠟の分析が、蜜蠟という物体の「本質」や「実体」を明らかにするような議論ではないとすれば、どのような議論なのだろうか。

ゲルーは、「第二省察」において、心の本性についても、物体の本性についても、「私は、純粋に主観的な確実性に閉じ込められたままである。どちらにおいても、私は、私の認識の可能性の条件を手に入れるのであり、事物の条件を、ではない。また、それらの本性の表象を手に入れるのであり、この本性が、それ自体で、現実にもそれらのものであるという確実性を、ではない」(Guerout,p.138)「問題は、物体の本質でも存在でもなく、そのような物体の表象を可能にする必要条件は何かである」(op.cit.,p.149)と述べる。そして、ここでいわれる「認識の可能性の条件」「物体の表象を可能にする必要条件」とは、「知性的観念のうちのみ存する」ことが知られる、という。

ウィリアムズは、このゲルーの議論を受けて、蜜蝋の分析は、本質や実体など直接に物理的なものの本性について行なわれるような「形而上学的議論」ではなく、「認識論的」な議論であって、「それらの本性について我々の持つ概念と知識についての議論」であると述べる。我々は、変化を通じて存続する何ものかとしての蜜蝋の概念を持っている。この概念は、感覚に与えられたあらゆるものは変化したのだから、感覚から得られたのではないし、この概念を有限のイメージの集合として存在する概念でもないから、想像力から得られたのでもない。純粋に知的な概念なのである。

上述の、「感覚上のあらゆるものが変化した」ということから、「変化したが存続しているものの概念は感覚によるのではありえない」ということへのステップは、認識論説をとれば次のように解することができる。我々は、諸感覚に由来する蜜蝋の観念を持っているという概念から出発する。しかし、感覚の観点からは、蜜蝋は変化してしまい、それでも我々はその蜜蝋が存続していることを知っている。従って、そのもともとの感覚的性質からの概念は、適当なものではなかったことになるし、また、ある特定の状態のみを示しうるに過ぎないいかなる感覚的性質からする概念も、多様な状態を通じて存続するものとしての蜜蝋の概念を説明するのに十分なものではありえない、ということになるのである (Williams,pp.222-223)。

蜜蝋の分析を、蜜蝋という物体の本質を明らかにするための形而上学的議論と考えた場合には、変化する、あるいは消える性質が本質でないと確実に言うことはできなかった。しかし、この分析を、我々が蜜蝋について持つ概念についての認識論的な議論と考えれば、「蜜蝋の概念は感覚的性質の変化を通じて存続し、想像力によっては捉え切れない無数の変化を受け入れるが、この概念は感覚や想像力によるものではない」ことが言えるのである。

そして、蜜蝋を感覚や想像力によって捉えられるものと考えることから、蜜蝋を捉え

る働きが、まさに「精神の洞見」「知性」によるものであることを明らかに知る時に、我々の蜜蠟の概念が「不完全」で「混乱」したことから、「明晰」で「判明」なものとなるのである。

以上のように、蜜蠟の分析を認識論的議論と解釈する場合、蜜蠟という物体それ自体の本質や実体といったものが明晰かつ判明になるのではない。そうではなく、我々の持つ蜜蠟の知識、概念が明晰判明になって、我々の認識が感覚や想像力ではなく知性によって行なわれていることを教えるのである。しかし、これですべての問題が解決されたわけではない。先に述べたように、『省察』のシノプシスは、蜜蠟の分析が「物的本性の判明な概念」の形成に何らかの役割を果たしていることを示している。では、(狭義の)蜜蠟の分析は、デカルトにおける物体の本性、すなわち本質規定の議論と、いかなる関係にあるのだろうか。この点について、次に考えてみることにする。

(5) 「物的本性の判明な概念」と蜜蠟の分析

『省察』における物質的事物の本質規定とは、その存在証明が行なわれる「第六省察」の前、「第五省察」においてなされ、物質的事物が精神としての私の外に存在するか否かには関係なく、ただ、「それらの事物の観念を、これが私の意識のうちにある限りにおいて考察し、そのうちのどれが判明」であるのかを考察することである (p.63)。ここでは、物質的事物とは量、特に連続量を持ったものと考えられ、デカルトはその「長さ、広さ、深さにおける延長を、判明に想像する」(先に述べたように、ここでの想像は知的理解の一つである)とする。また、デカルトは「第六省察」の冒頭においても物質的事物の本質の規定を行う。それによれば、我々が物質的事物を幾何学の対象として明晰判明に理解するという理由から「物質的事物は、我々がそれらを幾何学の証明の対象として考察する限りにおいて、存在しうる」(p.71)、すなわち、物質的事物は、幾何学的な延長を、そしてそれのみをその本質とする、と主張される。

では、蜜蠟の分析は、以上のような物体概念の形成においてどのような役割を果たしているのだろうか。それは、これまで見てきたように、物体の本質や実体を明らかにする、というものではなかった。

ここで、デカルトのある主張に注目したい。デカルトは蜜蠟が想像力によっては捉えられないということを述べた後で、次のように言っている。「結局、こう認めるの他はない、この蜜蠟が何であるかを、私は、決して想像するのではなく、精神によって捉えるのである、と。私はこの個別的な蜜蠟のことを言っているのである。蜜蠟一般について

は、そのことはもっと明らかであるからである」(p.31、強調は筆者による)。(1) で見たように、デカルトは蜜蝋の分析を始める前に、「一般的な概念はひどく混乱しているのが常であるから」、物体一般を考察するのではなく、具体的物体、すなわちこの個別の蜜蝋について考察すると述べている。このように、分析の前と後とでは、一般的な概念についての取り扱いが変わっている。これには、分析による概念の明晰化がかかわっていると考えられる。

デカルトが分析をはじめの際に念頭に置いていたのは、「心のうちにそれらの像を描き出すことができ、感覚そのものによってじかにつかまえることができる物体」すなわち想像力や感覚によって把握されると考えられた物体の概念であった。このような観点からは、物体の「一般的な概念」は混乱したものであろう。というのは、感覚や想像力の示す物体の像は、ある状況と時点における特定のものにすぎないゆえに、物体一般の概念は、様々な像の雑多な寄せ集めになってしまうからである。このような概念が明晰なものであることはできない。しかし、分析が行なわれた後には、個別の蜜蝋においても、感覚や想像力はその蜜蝋の特定の状況と時点における像の有限な集合をしか示すことができないことが言われて、我々は蜜蝋を感覚や想像力によってではなく、知性によって「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」として把握するのであり、この時に、蜜蝋について我々の持つ概念は明晰になるのであった。すなわち、分析後には、この個別の蜜蝋の概念について、それが知性によってのみ明晰に把握されるということが明らかなのである。そして、蜜蝋一般の概念を考えた場合に、個別の蜜蝋の概念においてすら感覚や想像力ではその無限の変化をたどり尽くすことはできないのであるから、蜜蝋一般の概念については、それが知性によってのみ把握されるということがより明らかなのである。

このように考えれば、個別の蜜蝋や蜜蝋一般の概念を超える多様性を持つはずの物体一般の概念が、知性によってのみ把握可能であることは容易に理解できるだろう。すなわち、蜜蝋についての我々の概念は、それが感覚や想像力によるのではなく、知性に由来するときに、「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」として明晰なものとなり、そしてそのことは、蜜蝋一般については(どのような観念として現れるかはテキスト上には示されていないが)より明らかである。さらに、物体一般についての明晰で判明な概念が、知性によらねばならないことは、いっそう明らかなのである。そして、感覚や想像力によらず、知性によって物体一般についての概念を把握しようとするならば、それは色、音などの感覚的(あるいは想像力による)性質を持つものとして

ではなく、幾何学的延長を本質として持つものの概念として現れる。そして、明証性の規則によって、この概念が真なるものとされて、(物体の存在証明はまだなされていないから)もし物体が存在するとすれば、その物体は延長を本質として持つ、ということが正当化されるのである。

蜜蝋の分析の役割は、物体についての主観的な概念の明晰化であり、そしてそのためには、感覚や想像力を排除し、知性によらねばならないことを示すことであった、と考えられる。

結びと補足

以上、蜜蝋の分析と、そのデカルトの物体概念の形成における役割について考えてきた。蜜蝋の分析の議論は、蜜蝋という物体の本質や実体を明らかにするような形而上学的な議論ではなく、蜜蝋という物体についての我々の持つ概念や知識の明晰化をねらった議論である。そして、この議論は、物体の本質の認識には、感覚や想像力を用いることができないことを示すという仕方、物体概念の形成に役立っている。

最後に、蜜蝋の分析において知性によって把握される「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」が、物体の本質と規定される「延長」とどのような関係にあるのかについて触れておきたい。「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」は、個別の蜜蝋についての概念であるから、物体一般についての概念である「延長」そのものではない。ゲルーは、「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」を『哲学の原理』第一部六十四節でデカルトが定義する「実体の様態」としての延長であると考え (Guerout, p.134)。そこでデカルトは、「同一の物体が、常にその量を一定に保ちながら、多くの様々な仕方、で延長しうる場合」に、延長を実体の様態と呼びうるとしている。さらに、ゲルーの述べるところではないが、デカルトは「第五省察」で物体の本質規定を行なう際に、延長のうちに様々な部分を認め、それら諸部分は、任意の大きさ、形、位置、場所的運動、持続を持つと考えている。「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」が何であるのかについて、デカルトがはっきりと述べているわけではないが、これらの「様態としての延長」あるいは「延長の部分」がそれではないかと思われる。

デカルトの物体概念については、個体化の問題、またそれに関連して運動や不可入性をどう考えるか、あるいは物体さらには自然学の体系と感覚との関係など、他にも様々な問題があるが、それらについては今後考えていきたい。

註

¹ この分けかたについては、ベイサードにしたがった (Beysade, p.9)。

² 例えばラポルトがこのように議論する。ラポルトは、蜜蝋の分析において見出されているものは、(幾人かの反論者が述べているように) 属性を抽象された、それ自身において考察された実体なのではないということを、第五答弁を引き合いに出して述べる(そこではデカルトは、「私は蜜蝋の概念の、その偶有性からの抽象をしたのではなく、むしろ、私は、それらの偶有性によって、いかにしてその実体が明らかにされるかを示すことを望んだ」と述べている)。その上で、「実体性の記号として一般的に考えられる永続性 *permanence*」が見出されるのは、蜜蝋を熱する前後において消えてしまったり変化するような「我々の感覚に相対的な偶有性、すなわち、ロックやライプニッツの語彙を使えば、二次性質なのではない」。それらを取り除いた後に残る「広がりを持った、曲がりやすい、変化しやすいあるもの」すなわち一次性質こそ、実体を明らかにするものとしてここで見出されているものなのであって (Laporte, p.63)、これは、物体の本質を構成する「延長」であるとされる (op.cit, p.66)。

³ 1643年6月28日付のエリザベトあて書簡において、デカルトは「物体、すなわち延長、形、運動は、知性のみによっても知られるが、想像力に助けられた知性によってはるかによく知られる」(アダン・タヌリ版全集第三巻 p.691、傍点は筆者による)と述べている。

デカルトからの引用は、(Euvres de Descartes publiées par C.Adam et P.Tannery, Vrin 1996)によった。『省察』および『反論と答弁』からの引用はこの第 VII 巻からのものであるが、頁数のみを示した。また、『哲学の原理』は第 VIII 巻に収められており、節番号を示したため、頁数を示さなかった。

参考文献

持田辰郎、「蜜蝋の分析」の諸解釈について『名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇)』vol.20、No.2、1984、pp.59-77(また同氏の「デカルト『省察』における物体概念の形成について」同論集 vol.24、No.1、1987、pp.29-43、にも多く教えられた。)

J.M.Beyssade, L'analyse du morceau de cire, in *Sinnlichkeit und Verstand*, Bouvier Verlag Herbert Grundmann 1976

M.Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons(I)*, Aubier 1953

J.Laporte, *Le rationalism de Descartes*, PUF 1945

B.Williams, *Descartes, the project of pure enquiry*, Reprinted in Penguin Books 1990

[哲学博士過程]

L'analyse du morceau de cire et la conception du corps chez Descartes

Toshihiko TAKENAKA

‘L’analyse du morceau de cire’ se trouve dans la deuxième Méditation. Le but de cette Méditation est la découverte de l’*ego* comme *res cogitans*(l’esprit), donc cette analyse aussi contribue à atteindre ce but. Mais Descartes dit dans l’abrégé des Méditations que: “une conception distincte de la nature corporelle (...) se forme, en partie dans la seconde Méditation elle-même, en partie aussi dans la cinquième et sixième Méditation.” Cette phrase signifie que, dans la deuxième Méditation, quelque chose se découvre non seulement sur notre esprit, mais aussi sur le corps matériel. Dans ce traité, c’est en rapport à la formation de la conception du corps que je mets en question l’analyse du morceau de cire.

En conclusion, cette analyse n’est pas l’argument métaphysique qui vise à éclaircir l’essence ou la substance de la cire, mais l’argument épistémologique qui vise à éclaircir la conception ou la connaissance que nous avons à propos du morceau de cire. Et cette analyse sert à la formation de la conception du corps en montrant que l’on ne peut pas utiliser les sens ou l’imagination pour reconnaître l’essence du corps et que c’est par l’entendement seul que l’on peut la concevoir clairement et distinctement.